

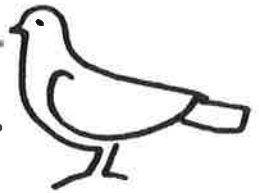
クラス名の由来

はと

創世記6：1～8：22に記されている「ノアの箱舟」の話に出てくる「はと」。特に8：11に記されている「はとはオリーブの葉をくわえていた」ところから用いる。それは「平和の象徴」である。

又、「はと」は「聖書の象徴」でもある。(マルコによる福音書1：10)

目に見える世界のみではなく、目には見えない大切なものに目を向け、そして「平和」を愛し、実現する人として、未来にはばたいて欲しいとの願いをこめて。



ほし

星といえば、イエス・キリストの誕生の時、東方の博士たちを、エルサレムまで導いた「ベツレヘム」の星で知られている。そこから用いた「ほし」。マタイによる福音書1：18～2：12（特に2：9以降）ルカによる福音書2：1～2：21)

聖書は又、主イエス・キリストを心から信じる人を星にたとえる。「世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つ」人に成長して欲しいとの願いをこめて。

(フィリピの信徒への手紙2：15～16)



ゆり

金城学院の校章は紅十字の中央に白百合をあしらったもの。この校章は「犠牲と純潔」「愛と正義」を私達に語っている。「ゆり」は聖書の中で、主として美しさの形容に用いる。(雅歌6：2)

金城学院につらなる私達一人ひとりが、「犠牲と純潔」「愛と正義」を覚えていて欲しいとの願いをこめて。



ひつじ

「迷い出た羊」のたとえから用いた「ひつじ」。羊は臆病で自衛力がなく、視力が弱く、迷いやすい。そこから、「ひつじ」とは、神を離れて迷う人々の形容として用いる。「よい羊かい」は「キリスト」を表わす。(マタイによる福音書18：12～14 ルカによる福音書15：3～7)

神を離れて迷うことのない「ひつじ」として、又、真実の羊かいに飼われている「ひつじ」でありたいとの願いをこめて。

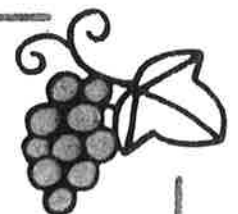


ぶどう

ヨハネによる福音書15：1～10に記されている「ぶどう」。特に5節から用いた。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」「わたし」とは、「主イエス・キリスト」のことである。

キリストの命に生かされる私達でありたいとの願いをこめて。



オリーブ

イスラエルにおいて最も重要な果樹のひとつで、油は様々なことに用いられた。

神さまの御用につく人が、任職式でその頭に油を注がれる時に使われた。

(サムエル記上10：1など)

教会の長老たちは教会員に病人がいる時は、患者にオリーブ油を塗って祈る習慣があったこと。

(ヤコブの手紙5：14)

又、ノアの箱舟の話が出てくるはとが、オリーブの新芽をくわえてくること。(創世記8：11)
これらから、心や身体を休ませ、再び飛び立って行くことができることを願って。



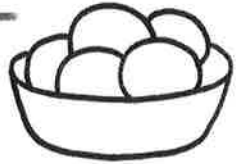
マナ

イスラエル人がエジプトを出て40年の放浪の生活で、空腹に苦しんだ時、神さまが天から与えて下さった食物の名。そして、その食物は、一人ひとりに

多すぎも少なすぎもせず、ちょうど必要な量が与えられた。

(出エジプト記16：1～36)

子ども達が、このマナに想いを寄せ、食べ物に感謝し、食する健康な身体を与えられていることに感謝できる人になることを願って。



にじ

創世記6章～記されるように、神様の御前に正しいノアと家族、動物たちを箱舟に乗せ、洪水から救われたのち神様は

「二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。・・・すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。」とノアと息子たちに約束された。また虹の輝きの美しさは、天における神の栄光の象徴とされる。

幼子がいつも神様に守られその栄光に照らされることを願って。



ひかり

(預かり保育)

「その光は、まことの光で、世に来て全ての人を照らすのである。(ヨハネによる福音書1章9節)」

その光とはイエス・キリストのことであり、本園の主題聖句である「光の子として歩みなさい。(エフェソの信徒への手紙5章8節)」も私たちが光であるイエス様の子として歩むことを望んでおられる。

子ども達が光であるイエス・キリストの愛と誠に倣い生きる者であるようにと願って。

